

# 協力的な指導の課題 — 学習指導の工夫と小学校理科教育 —

菊池 健夫

(平成8年9月30日受理)

## The Subject on System of Team Teaching — Contrivance of Study and Elementary Science Education —

Takeo KIKUCHI

(Received September 30, 1996)

### I ティームティーチング方式

#### 1 ティームティーチング方式導入の経緯

我が国におけるティームティーチング方式の実践的研究は昭和30年代から試行されていたが、本格的な導入は平成5年度からと言える。これには、次のような経緯がある。

(1) 昭和61年4月23日の臨時教育審議会「教育改革に関する第2次答申」において、第2部「教育の活性化とその信頼を高めるための改革」第3章「初等中等教育の改革」の第4節「教育条件の改善」に次の提言がある。

学級編制および教職員定数については、児童・生徒の能力・適性に応じた教育・指導を可能にし、児童・生徒と教員の間心の触れ合いや人間的なつながりを育てるため、学級編制および教職員配置について、一層の改善を進める必要がある。このため、当面、1学級の児童・生徒数の上限を40人とすること(40人学級)の実施を含む現行の教職員定数改善計画の円滑な実施に努める。

また、現行改善計画の完成後は、小・中学校の教員配置について、欧米主要国における教員と児童・生徒数の比率等を参考にしつつ、児童・生徒数の推移等を勘案しながら、さらに改善を図る必要がある。この場合において、児童・生徒の個性を尊重し、地域や児童・生徒の実態等に応じたきめ細かな教育・指導ができるようにするため、学級編成の基準を弾力化し、市町村教育委員会が、

自らの判断において、学級規模を工夫したり、あるいは教育・指導の方法や形態(チームティーチング、習熟度別指導、補充指導等)を工夫することができるようにする。

(2) 平成元年3月15日告示の小学校学習指導要領の第1章総則、第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」2の(5)に「学校の実態に応じ、教師の特性を生かしたり、教師の協力的な指導を行ったりするなど指導体制の工夫改善に努めること」とある。平成元年6月の文部省による小学校指導書「教育課程一般編」には、次の記述がある。

指導体制の工夫に当たっては、教師一人一人にも得意の分野、年齢の違いなど様々な特性があるので、それを生かしたり、学習形態によっては、教師が協力して指導したりすることにより指導の効果を高めるようにすることが大切である。

その具体例としては、交換授業、合同学習、ティーム・ティーチングなどが考えられ、各学校の実態に応じて工夫することが大切である。

(3) 平成5年1月14日に、「教職員定数の在り方に関する調査研究協力者会議」が、「今後の教職員配置の在り方について」の最終報告をしている。そのⅡ「今後の教職員定数の在り方」の1「小・中学校」(1)「教職員配置の在り方」1)「新しい指導方法を実施するための教職員配置」に次の提言がある。

個に応じた多様な教育を推進するためには、一斉授業の中で指導上の工夫をすることに加えて、教育指導の展

開に応じて、適宜、個別指導、グループ指導、チームティーチングなどの新しい指導方法を積極的に実施できる教職員配置をする必要がある。現在の教職員配置では、このような指導を常態として導入することは困難であり、新たに必要な教職員が配置されてはじめて、多様な教材教具を開発し、児童生徒の興味・関心や多様な考え方、理解の仕方等に応じた指導など従来以上に多様な指導方法をとることが可能となる。

文部省においては、平成3年度に、指導形態の多様化に関する調査研究協力校65校を指定し、必要に応じて1人ないし2人の教員を新たに配置し、個別指導、グループ指導、チームティーチングなどの在り方に関する実践的な調査研究を行った。調査研究協力校においては、これらの指導を適宜実施することにより、ア) 児童生徒が意欲的に授業に取り組むようになること、イ) 一人一人のつまずきや理解の不足に早く発見でき適切な対応ができること、ウ) 一人一人に眼が届き生徒指導面でも効果があること、エ) 学級としてのまとまりが作り易くなる効果があることなどが指摘されている。また、児童生徒にとっては、ア) 自分に合った学習課題が提示されるので、学習しやすい、イ) 分からないところや疑問点をすぐ聞くことができ安心して授業に取り組めるという顕著な効果が見られることなどが指摘されている。

新しい指導方法の推進に対応する教職員配置については、まず、算数、数学、外国語など、特に児童生徒の習熟の程度や興味・関心等の違いが生じやすい教科、学年について、そのための対応ができるようにすることが適当である。その場合、各都道府県教育委員会は、個別指導、グループ指導、チームティーチングなどに積極的に取り組む学校で、一学級当たりの児童生徒数の多い学校等にまず優先的に教職員を配置するなどの工夫をすることが適当である。また、新しい指導方法の工夫としては、他にコンピュータの活用がある。そのため、地域のコンピュータ教育の中核となる小・中学校に教職員を配置し、コンピュータを活用した一人一人に即応する教育を実施できるようにする必要がある。

(4) 平成5年3月31日の文部省による「第6次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画について」には、次の記述がある。

1. 第6次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画は、6年計画(平成5年度～平成10年度)とする。
2. 改善の基本方針は、臨教審答申等における個性尊

重の必要性、それらを受けた新学習指導要領の趣旨を踏まえ、個に応じた多様な教育を展開することができる教職員配置をすること。

3. 改善事項として次の措置を講ずる。

- チームティーチングなどの新しい指導方法を取り入れて、例えば学習の進度や理解の程度、あるいは学習課題等に応じて、複数の教員が協力してグループ指導、個別指導を実施するなど、様々な指導上の工夫ができるような教職員配置を行う。
- 生徒指導困難校への教員配置の充実などきめ細かい生徒指導が充実できるような教職員配置を行う。
- 効果的な教育指導の実施のため、通級指導の導入等を行う。
- 複式学級、特殊学級の編制の標準について改善を行う。
- 円滑な学校運営のため、大規模校に教頭の複数配置を行う。
- 養護教諭、学校栄養職員、事務職員について改善を行う。
- 特殊教育諸学校について、学級編制の改善を行うとともに小中学校に準じた教職員配置の改善を行う。

平成5年度～10年度における改善増は30,400人であるが、この間の教員の自然減が60,400人と推定され、差し引き30,000人の減少に留まると示されたため、一部に、教職員の急激な減少の単なる緩和措置との声もあった。しかし、平成5年度～平成10年度の6年間に、チームティーチングの導入等で、小学校に8,441人、中学校に5,856人の改善数が示され、平成5年度の加配措置が実施されるに及んで、確実にチームティーチング方式が学校に導入されることになった。

## 2 小学校におけるチームティーチング方式

### (1) チームティーチング方式の定義と意義

#### <定義>

チームティーチング方式とは、複数の教師がチームを構成して授業を行う方法の総称として用いられる。我が国では、従前より「協力教授」と言う表現をしていたが、これは、Team Teachingの訳語である。いっそのこと、Team Teachingはチームティーチングで通してしまえば良さそうだが、Team Teachingには、

## 協力的な指導の課題

その理論がある。複数の教員が指導に当たるでは許されない。そこで、チームティーチング方式と呼称する。問題解決学習を問題解決的な学習、体験活動を体験的な活動と表現していることに通じるものがある。

表記の仕方も、複雑さを極めている。チームティーチングがある。チーム・ティーチングもある。T・T、やT・T、TTとある。中点「・」は我が国独特の表記だそうで、菊池は、チームティーチング方式、TT方式ないしはTTと表記している。次の各事項に基づいたものとして把握しておきたい。

- ・ チームとは、学習者集団の指導を協力して受け持つ複数の教員の組織である。
- ・ 学習者集団のグループ分けに関する明確な原則をおくことが大切である。
- ・ チーム内の教員相互の意思疎通と、そのためのチーム会議が必要となる。
- ・ 教師一人一人がそれぞれの専門性や持ち味を生かしながら、互いに協力して児童の指導援助に当たる。
- ・ 複数の教員によって構成されるチームが、学習目標や課題に応じて学習者の集団編制を弾力的に変えることにより指導の効果を上げようとする指導方法の一つである。
- ・ 複数の教員が、協力し合って指導計画を作成し、それに基づいて、それぞれの教員が専門性や持ち味を生かして、当該学級の指導計画を作成し、授業を実施する。
- ・ 周到な指導計画と各教員の相互補完的な役割分担が必要である。
- ・ 多様なグループ編制を可能にする施設条件も必要になってくる。
- ・ 協力して行う主な内容は、①指導計画や指導案の作成、②必要な教材の作成、③指導の実際、④指導の評価である。

### <意義>

チームティーチング方式は、一人一人の児童の個性や能力をとらえ、個に応じた学習指導を効果的に行うことができる。また、教員が一人で指導するより、よりきめの細かい、柔軟で、幅の広い学習指導ができる。その他、次のようなよさがある。

- ・ 教師の専門性や持ち味を生かすことができる。
- ・ 学習集団の規模を教科や単元、教材に応じて柔軟に編成しやすくなる。

- ・ 児童の個性や個の能力に対する教師の対応の幅が広がる。

### (2) 指導形態における位置づけ

チームティーチング方式については、様々に工夫されているが、概ね次のような方法がとられている。

#### ① 学習集団の規模

- ・ 1学級内の児童を二分割し、二人の教師が分割された集団の各々を個別に指導する。三人の教師であれば、1学級を三分割する。
- ・ 1学級内を2～4人の小集団ないしは、5～8人の中集団にグループ編制し、二人の教師が同数のグループの指導に当たる。
- ・ 1学級について、一人の教師が全体指導に当たり、もう一人の教師が個別指導に当たる。我が国では、一斉指導の形態をとることが多いので、この方法はよく取られる。

#### ② 学習課題への対応

- ・ 各児童が各々の課題を有している場合、1学級内の児童を二分割し、二人の教師が分割された集団内の個人の課題に対応する。
- ・ 課題別に小集団が構成された場合、複数の教師が課題別のグループを分担して指導する。
- ・ 1学級内の児童の学習課題が共通である場合、一人の教師が全体指導に当たり、もう一人の教師が個別指導に当たる。

#### ③ 学習コースへの対応

- ・ 個人または小集団で、学習課題の解決のコースが共通である場合、一人の教師が全体指導に当たり、もう一人の教師が個別指導に当たる。
- ・ 個人または小集団で、学習課題の解決のコースを選択し、学習課題の配列の順序、解決の手順の順序に違いがある。すなわち、かなりの部分を児童に任せる学習指導においては、コース別の個人または小集団を、複数の教師が分担して指導する。

#### ④ 学習の習熟度への対応

- ・ 1学級について、一人の教師が全体指導に当たり、もう一人の教師が個別指導に当たる。
- ・ 1学級を習熟度別にグループ編制した場合、複数の教師が習熟度別グループを分担し指導する。

#### ⑤ 学習指導の場の分担

- ・ 同じ教室内で複数の教師が、各々の場を定めたり、指導に当たる児童を固定化したり、教室と特別教室な

いは教室と校庭と場を定めたりするなど、完全分担型の指導がある。

- ・ 配慮を要する児童を複数の教師が交互に当たって指導したり、指導の場を交替したりするなど、重複型の指導がある。
- ・ 教師が移動して指導に当たる教師巡回型と、教師の場を定め、児童が移動して助言を受ける児童巡回型がある。

(3) チームティーチング方式の例

実際の指導においては、(2)で記述してあるような学習指導の形態が単独で実施されることはほとんどなく、様々に組み合わせて指導している。



図1 課題別グループの指導

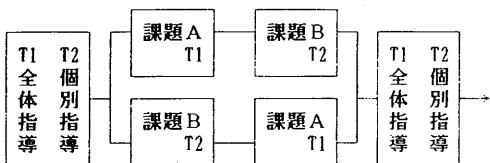


図1は課題別の指導の例だが、導入時においては、T1が、全体指導に当たり、課題別のグループに分かれてからT2との分担指導が行われる。終末時においては、またT1が、全体指導に当たる。

図2は習熟度別の指導の例だが、1学級内ないしは、学年合同においても、導入時においては、T1が、全体指導に当たり、展開時において、個別指導がなされたり、習熟度別のグループの分担指導が行われたりする。終末時においては、またT1が、全体指導に当たる。

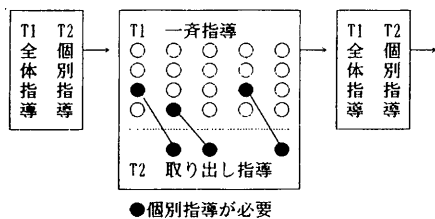
図3は教師の専門性を生かしている例だがT1とT2が交代している。児童から見て複数の教師が同等に受け止められることも大切である。

II 小学校理科とチームティーチング方式

1 小学校教育実現の視点

現在、小学校教育全般については、次のように課題が設定され、各教科等でその解決に努めているところであ

① 学級内



② 学年合同

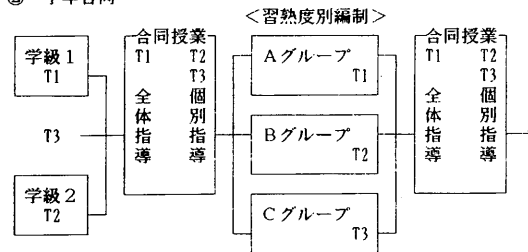


図2 習熟度別グループの指導

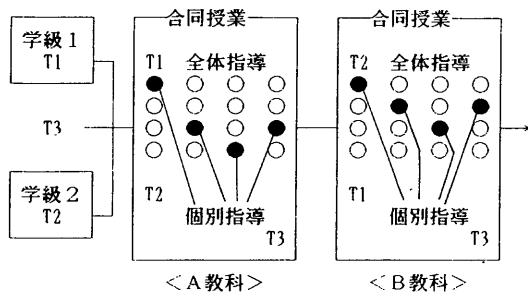


図3 教師の専門性を生かした指導

る。

- (1) 教育課程全般にわたって、子どものよさや可能性を生かし新しい学力観に立つ教育を実現する。
- (2) 子供たち一人一人が新しい学力観に立った学力を自ら獲得し、身に付けるように教科間等の関連を図った目標や内容を設定する。
- (3) 子供たち一人一人が、よさや可能性を発揮して、新しい学力観に立つ学力を獲得することができるよう、弾力的な学習指導を構想し展開する。子供たちが、満足するまで指導を展開する。
- (4) 子供たち一人一人のよさや可能性を生かし、新しい学力観に立つ学力を育てる観点に立ち、教材を吟味・選択したり、開発したりする。

## 協力的な指導の課題

(5) 子供たち一人一人のよさや可能性を生かした豊かな自己表現を支援する一体的な指導と評価を充実する。

(6) 共感し学び合う学習活動を重視する。

以上の6項目を基盤として、小学校理科についての課題を挙げる。

### 2 各学年の課題

現在、小学校理科は第3学年以上に設置されている。中・高学年の課題から検討したい。

#### (1) 中学年の課題

やや主観的かも知れないが、今の子供たちにとって、美しいものを美しいと感じる心、疑問や不思議さを感じる心、理性に基づく感じる心を育てることが大切であると言える。

自然の美しさを感じ、不思議さに気付く、問題解決の活動を通して、機能美や規則性に感動する子供を育てることが必要であると考え。

#### (2) 高学年の課題

自然に関する概念の形成をするために、子供はどのように学んでいるのか、どのように学ぶことが効果的なのか明確にする。子供が、自らの力で自然概念を形成する過程で、互いに学び合いながら、自分の持っている概念や思考がどのようなものであるかをに気付いたり、間違いに気付いたりして、新たな概念形成へ転換するために学級集団や小集団の中での概念形成に着目する必要があると考える。

以上を中・高学年の課題として把握している。

### 3 小学校理科の学習指導の課題

やや項目の羅列になるが、小学校理科における学習指導で課題となる事項を挙げる。

#### (1) 問題解決活動の見直し

- ・自然事象との感動、驚き、疑問をもつ触れ合い
- ・子供がのめりこむ自然事象
- ・自分の考えをつくり、友と高め合う
- ・まとめと学び方の振り返り
- ・自分の学び方の確立
- ・他の事象へのあてはめ
- ・見方・考え方への深まり、広がり

問題解決活動の見直しは、小学校理科指導において、最も重視されている。

#### (2) 学習内容の見直し

・内容のつながり

・系統性

#### (3) 体験活動の充実

- ・問題意識、意欲を高める体験
- ・学習形態、体験の場と内容
- ・体験活動を促す教材の工夫
- ・感じる心、見方、考え方を深める体験
- ・余裕のある体験活動
- ・発展性のある体験
- ・直接体験から間接体験へ

#### (4) 教材の見直し

- ・子供の意欲の喚起
- ・活動が持続する教材
- ・概念を深める教材

#### (5) 学習ゾーンの拡大

- ・地域の教材化
- ・校外学習の工夫
- ・校内から校外、地域へ

#### (6) 自然環境の見直し

- ・子供の心をゆさぶる環境
- ・開かれた自然環境
- ・自然環境づくり

#### (7) 指導と評価

- ・意欲、情操面の指導と評価
- ・共感的理解による指導と評価
- ・多面的、総合的な指導と評価
- ・新しい視野での指導と評価
- ・自分自身を高める評価

#### (8) 多様な学習方法の開発

- ・内容に合った学習形態と充実した情報交換
- ・個、小集団、全体との関わり、場の工夫
- ・形態の弾力性、グループ構成
- ・チームティーチング方式の導入
- ・コンピュータの活用

今回の主題は、この(8)多様な学習方法の開発と深く関わる。中でも、チームティーチング方式の導入が主である。チームティーチング方式は指導方法であって、学習方法とは、相対するものである。しかし、指導と学習は表裏一体ととらえることもできる。したがって、多様な学習指導方法の開発と表現すべきかも知れない。

### 4 小学校理科の指導事例

ティームティーチング方式を導入した指導事例を小学校理科第6学年の単元「人と環境」で提示したい。

(1) 本単元の目標

人と他の動物や植物が、周囲の環境の中で互いに影響し合っている関係性を調べ、問題を意欲的に追究していく活動を通して、自然界のつながりを総合的にとらえ、生命を尊重する態度を育成する。

[自然現象への関心・意欲・態度]

- ・ 人が生きていくために必要なものが何なのかを調べようとする。
- ・ 人や他の動物や植物が周囲の水や空気などと関わりをもって生きていることや、自然界との関わりを総合的に見ようとする。
- ・ 自然を大切に、生命を尊重しようとする。

[科学的な思考]

- ・ 人は水・空気・食物を必要とし、動物・植物とつながりをもって生きていることを考えることができる。
- ・ 人が自然界の一員として生きていることを考えることができる。

[観察・実験の技能・表現]

- ・ 生物の酸素・二酸化炭素の出入りを、気体検知管や石灰水などを使って調べることができる。
- ・ 人と他の動物や植物と周囲の環境に関わりがあることを調べることができる。
- ・ 人と他の動物や植物、周囲の環境との関連について調べたことを、自分なりに表現し、まとめることができる。

[自然現象についての知識・理解]

- ・ 人は生きるために水・空気・食物が必要で、他の動物や食物と相互に関連をもって生きていることが分かる。

(2) 本単元について

この単元では、人は自然界で単独で生きているのではなく他の動物や植物と関連をもって生きているという見方や考え方を養うことがねらいである。そして、人が生きていくのに必要な水・空気・食物を通して周囲の環境との関わりを調べ、その活動を通して自然界のつながりを総合的に見ようとする態度を育てたい。

子供はこれまでに人と他の動物について体のづくり・呼吸・消化等を学習しており、人の体のづくりとはたらしきについて他の動物との共通点や差異点があることを捉えている。また、生物が生きてためには、呼吸をし水が

必要であることは共通しているが、植物は日光が当たると澱粉をつくって養分とし、人や動物は自分では栄養分を作り出すことができず、外から取り入れていることなどに違いがあることに気付いている。

ややもすると、人は特別な生き物で自然界の生物とは違っていると考えがちであるが、ここでは人が生きていくためには、周囲の環境との相互の関わりが必要なことに気付き、自分を取り巻く環境を調べることに意欲的な働き掛けをするようにしたい。人が生きていくために必要な環境には、他の動物や植物が生きており、環境として役割を担っていることを学んで、人と環境との関わりを捉えるようにしたい。

(3) 指導の手立て

学ぶ側に立って多様な子供の個性を受け入れ、対応していくには、指導者とその多様な子供の個性やよさに応じなければならない。子供の活動内容によって、学習集団、学習コース、学習空間を様々な組み合わせで行うことが必要となる。更に、達成度別の対応が求められる。子供が問題を解決していく過程で個に応じた適切な支援をすることで意欲をもって問題を追究し、解決することができる。その過程で科学的な見方や考え方を得ていくと考えた。そのためにティームティーチング方式を導入する。

1. 一人一人の子供をよく把握し、興味・関心・問題解決の過程等の多様性に対応する。
2. 学習集団、学習コース、学習空間の変化に対応する。
3. 観察・実験の操作や方法を確実なものにする。

(4) 学習指導計画

第1次 人が生きていくために必要なもの

第1～2時 人が生きていく上で必要なものを考えよう。

第3～6時 食物・空気・水について調べよう。

第2次 人と他の動物や植物と水・空気・食物を通しての関わりを調べる。

第7時 食物・空気・水について調べたことを発表しよう。

第8時 食物・空気・水の相互の関わりを探ろう。

第9時 人と他の動物や植物の相互の関わりを調べ、まとめよう。

第3次 人と関わりのある環境

第10時 私たちの生活と関わりのある環境を探ろう。

協力的な指導の課題

(5) 第1次, 第4時の学習指導

- ① 目 標  
 空気について確かめてみたいことを, 自分なりの方法で調べることができる。
- ② 学習活動
- 前時で, 自分が疑問に思ったことを発表する。
- ・ 本当に植物が空気を作っているのだろうか。
  - ・ 植物は, 二酸化炭素を吸って酸素をはくって本当かな。
  - ・ 空気は, 土からできるのではないかな。
  - ・ 空気は, 水から出てくるのではないか。
  - ・ 水草が空気を作っているのではないか。
- ◎ 空気について, 確かめたいことを調べよう。
- 自分の確かめたいことを, はっきり把握する。各自, カードに書いて掲示板に貼る。  
 (同じもの, 似たものは互いに近くに貼る)
- 予想別にグループを作る。  
 (カードの集まりを参考にして)  
 (個人でも可とする)
- グループで実験する。
- ・ 予想や方法を話し合う。
  - ・ 実験の準備をする。
  - ・ 実験する。記録する。
- 実験結果や経過を発表する。
- ・ 時間が足りない。
  - ・ 明日まで待ってほしい。
  - ・ もう一度やりたい。
  - ・ 違う方法でやりたい。
- はっきりしたことと次の課題をまとめる。
- ③ 上記の学習活動に対するチームティーチングによる教師の支援

3. グルーピングしやすいように予想別に場所を設定する。
4. 活動内容によって, 個々に指導をする。
- ・ 特に, 陸上の植物が空気を出しているかについて調べている子供へ助言する。  
 (二酸化炭素から酸素へのガス交換を含む)
5. 各グループの実験の結果や経過を発表するように促す。
6. 本時で分かったことと次時の課題を整理する。

- はっきりするように助言する。
3. うまくグループに入れない子供の問題意識を捉え, どのグループなら解決できるか助言する。
- T2 特に, 水草が空気を出しているかについて調べている子供へ助言する。
- T3 陸上の植物・水草以外のものが空気を出しているかについて調べている子供の活動を促す。
5. 自分の担当していたグループで, 発表されていない子供の疑問や願いを発表するように促す。
6. T1の考え違いや見逃しを補助する。

(6) 考 察

「人が生きていく上で空気が必要」という認識は全ての子供がもっている。しかし, その空気がどのようにして供給されているかについては問題意識があまりない。また, 地球規模の自然現象を, 身近な事象から把握, 認識し, 仕組みを全体的に捉えて心を揺さぶるまでの感動を生むのは容易ではない。一方で子供は, 各時間毎の学習に熱心に関わり, 自分と密接に関係している問題への興味・関心の高さも見せる。

空気(酸素)を供給しているものは, 植物・水草・水・土などと子供は予想を立てる。その理由として, 光合成, 淡水・海水の生物の存在, 土中の生物の存在等を挙げる。特に, 植物の成長で学習した自然事象をもとに, 植物の作用を推論した子供が多く見られ, 既習の学習経験を生かして予想をもち表現できるようになっている。

子供たちには, 自分と同じ目的を持った友達同志で容易にグループを作ることができ, 協力して計画を立てる様子が見られる。また, 土を調べるグループは3人だけであったが, 自分たちの考えにこだわりを見せ, こだわりを大切にして, アイデアを出し合い最後まで熱心に実

T 1	T 2・T 3
1. 前時の学習を思い出し空気についての疑問を発表するように促す。	1. 状況を観察する。
2. 確かめたいことを書いたカードを掲示板に整理するのを手伝う。	2. 確かめたいことを書いたカードを掲示板に整理するのを手伝う。 ・整理する観点を示唆する。 ・カードが書けない子供に確かめたいことが,

験を行っていた。

陸上の植物の酸素供給は、ビニルで覆い気体検知管を活用することにより、子供の力で明確に測定できる。しかし、水・土からは、酸素発生のないことや水草については、子供の考えで酸素発生を確認する難しさがあり、グループを作り協力して観察・実験をすることと共にチームティーチングが有効に機能する。

### Ⅲ ティームティーチング方式と児童の意識

#### 1 意識調査の実施とその結果

平成5年度より、教員の加配を1名受け、主として下学年(第1学年～第3学年)の算数を中心にチームティーチング方式の導入を図っている小学校の児童に対してアンケート調査を依頼した。平成5年度からの実施であるので、平成8年度においては第6学年まで、その経験がある。

また、この小学校は平成7年度において、全国小学校理科教育研究会の東京都大会の会場校であり、チームティーチング方式による指導を特色の一つに取り上げた経験がある。平成6年度からは全学級でチームティーチング方式による理科ないしは生活科の指導をおこなっている。

調査は平成8年6月に、あまり経験のない第1学年を除く学年から各1学級を選んで実施した。回答は183名からあった。

#### <子供の意識>

一つの学級に二人以上の先生がいて学習することについてあなたはどうかの設問に対する回答は表1のような結果であった。

表1 TT方式についての子供の意識

子供の意識	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計
①好む	32	24	18	23	18	115
②好まない		1	6		5	12
③どちらでもない	7	7	13	13	16	56

平成8年6月 練馬区立K小学校  
各学年1学級 計183名

表1を読み取り易くしたのが、図4である。チームティーチング方式を好むとしている子供が115名63%に

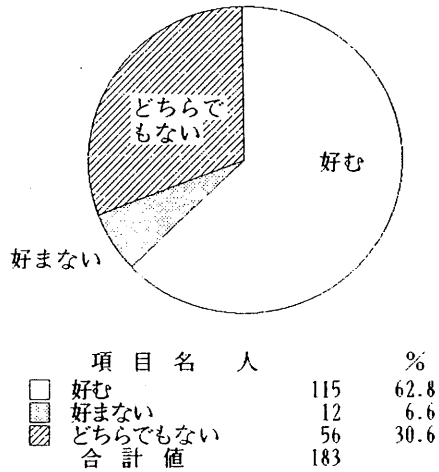


図4 TT方式についての子供の意識

対象 第2学年～第6学年

達し、どちらでもない56名を加えると171名となり90%を超える。懸念されるのは、好まないとした子供が12名7%いることである。どちらでもないことを、こちらに加えると68名37%に達する。いずれにしても、この段階では、チームティーチング方式は子供に受け入れられていると判断したい。

表2 TT方式を好むと答えたその理由

(複数回答)

子供の理由	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計
①説明が分かりやすい	27	8	6	12	10	63
②分からないことを、すぐに聞ける	21	10	8	8	1	48
③そばに来て、親切に教えて貰える	25	8	8	6	5	52
④勉強することがよく分かる	9			2	1	12
⑤その他			1		1	2

平成8年6月 練馬区立K小学校  
各学年1学級 計183名の中の好むとした 115名

表2は表1に関する設問の付問として好む理由を尋ねたものの回答である。表2を読み取り易くしたものが、図5である。チームティーチング方式は、説明が分かり易い36%、そばに来て親切に教えて貰える29%、分か



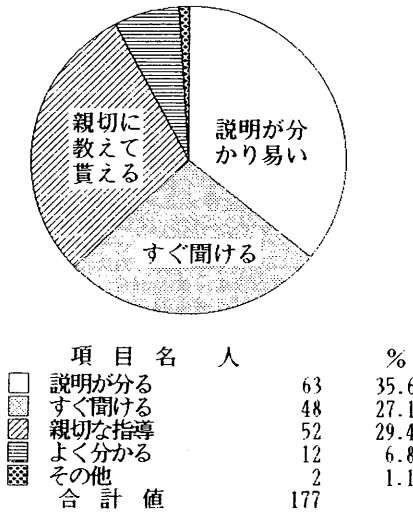


図5 T T方式を好む理由  
対象 第2学年～第6学年

らない事をすぐに聞ける27%などを理由にしている。学習内容が理解できることに通じる事例であるが、勉強することがよく分かるとは回答していない。

現在の学習指導においては、教え込みをなるべく除去する方向で工夫している。分からないことをすぐに聞けると、分からないことをすぐに教えて貰えるとは一線を画したい。ここでは、聞いてきた子供にどう支援するかが課題である。いずれにしても、分からないことをすぐに聞けるが、高学年ほど低くなることは評価できる。

表3は、子供がどの学習においてチームティーチング方式を希望するかの回答である。図6は第3学年以上をグラフ化したものである。周知の通り、第3学年から生活科はないが、ほぼ各教科が揃う。家庭科を含めた全教科は高学年からである。第2学年において生活科が多いことは理解できる。生活科の実践例では学年合同のチームティーチング方式がよくある。10%以上を挙げると算数15%、理科17%、図画工作17%、体育18%となっている。体育は学年合同のチームティーチング方式がよく導入され、運動会の練習などは顕著であり、子供の経験も多い。観察・実験等技能に関する内容の多い教科にT T方式の導入を望んでいる傾向がある。

2 検討を要する事項

チームティーチング方式を好まないとする子供が、

表3 子供がT T方式を望む各教科等

(3項目まで選択)

各教科等	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計	3年以上計
①国語		3	10	9	5	27	27
②社会		18	2	7	12	39	39
③算数	23	10	16	18	15	82	59
④理科		17	20	16	15	68	68
⑤生活	19	4	2	1	5	31	12
⑥音楽	3	6	4	2	3	18	15
⑦図工	32	16	17	16	17	98	66
⑧家庭				11	13	24	24
⑨体育	16	10	24	18	20	88	72
⑩道徳	8	2	4	5	4	23	15

平成8年6月 練馬区立K小学校  
各学年1学級 計183名

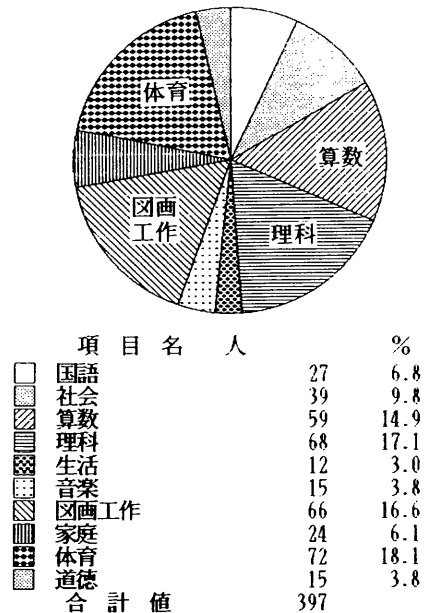


図6 T T方式を望む各教科等  
対象 第3学年～第6学年

7%いることである。児童は好き嫌いははっきりしていて、どちらでもないが、30%いることも、このような調査としては多いようである。

好まない理由を尋ねたら、迷ってしまうが多かった。TT方式では、多数の考え、または、能力の高い子供の考えで簡単にまとまってしまうような時、T2が少数の考えを代弁して発言し再考を促すことがあるが、迷ってしまうが高度な学習につながるのか、迷わせたままで終わるのかは今後の課題となるところである。

#### IV まとめと今後の課題

##### 1 まとめ

協力的な指導すなわち、チームティーチング方式導入の課題として、学習指導の工夫と小学校理科教育を取上げた。

我が国における本格的な導入は国の予算に教員の加配が計上された平成5年度からと言える。昭和61年4月23日の臨時教育審議会「教育改革に関する第2次答申」において提言があって7年の歳月が流れた。

小・中学校の教員配置について、欧米主要国における教員と児童・生徒数の比率等を参考にしつつ、児童・生徒数の推移等を勘案しながら、児童・生徒の個性を尊重し、地域や児童・生徒の実態等に応じたきめ細かな教育・指導ができるようにするため、学級編成の基準を弾力化し、教育・指導の方法や形態（チームティーチング、習熟度別指導、補充指導等）を工夫することができるようにする。は画期的なものであった。

現在、小学校のTT方式は算数を中心に実践されているが、算数とともに理科はどうかと言うことでまとめてみた。TT方式については、菊池が平成5年度において東京都教育庁指導部の小学校教育開発委員会「教育課題部会」の委員長であった時に、教育庁指導部から提示のあった資料を基に論議したことを中心にしてまとめた。小学校理科の実践例は、平成6年度において、担任と他校の教師とともに実施した菊池の指導事例である。

チームティーチング方式の導入は、我が国が目指している個に応じた教育の実現を図る有効な手段として指導の工夫を積み上げていくことが極めて重要であると考えている。

##### 2 今後の課題

平成5年度において、チームティーチング方式の導入が図られた時、小学校では教室内を他の教師に見られることを理由に反対がなかったわけではない。しかし、現在はそのような声は聞くことがない。むしろ、歓迎の声が大きい。TT方式の導入があっても、今後の教員数は減少する。国の財政には大変厳しいものがあって、計画通りの実施も危ぶまれている。個に応じた教育の実現はTT方式の導入だけではないが、この誘導施策は是非とも発展させたいものである。

教員養成に関わる者にとって、小・中学校の教員配置について、欧米主要国における教員と児童・生徒数の比率等を参考にしつつ教員の定数の増加を願いたい。将来が期待できる優れた学生は多数いて努力している。

#### 参考資料

- 文部省 小学校指導書  
「教育課程 一般編」  
平成元年6月15日
- 教職員配置改善研究会／編 ぎょうせい  
「教師のためのチームティーチング実践事例集」  
平成5年7月20日
- 東京都教育庁指導部初等教育指導課  
「平成5年度教育開発委員会教育課題部会指導資料」  
平成6年1月
- 東京都練馬区立開進第三小学校 実践報告書  
「こころ豊かでたくましい子供の育成」  
平成7年10月20日